

農 作 概 況

〔水 稲〕

1. 作付の概況

九州における平成7年産の水稻作付面積は、256,700haで、前年に比べて13,400ha (5%) 減少した。品種別の作付状況を見ると、ヒノヒカリが作付面積の40.4%、コシヒカリが15.3% を占め、両品種で約56% の作付面積割合となった。

2. 作柄の概況

九州における平成7年産水稻の収穫量は1,310,000 tで、前年産に比べて167,000 t (11%) 減少した。これは、史上1位の多収であった前年産に比べて10 a 当たり収量が37kg (7%) 減少し、さらに、作付面積が減少したことによる。

九州平均の作柄は、作況指数106の「良」で、10 a 当たり収量は510kgと昨年の547kgに次ぐ史上2位の高水準であった。これは、7月上旬から8月下旬まで高温・多照の好天に恵まれ、1m² 当たり籾数が「やや多」ないし「多」に確保され、その上台風などの気象被害や病虫害等の被害も少なかったことによる。県別の作況指数は、宮崎県が114、大分県が109、長崎県および鹿児島県が107、熊本県が106の「良」で、福岡県および佐賀県が103の「やや良」であった。

3. 生育概況

1) 普通期水稻

田植期は、平年並みないし3日程度遅かった。活着は平年並みであったが、7月上旬前半まで低温・寡照に経過したことから初期生育はやや遅れた。その後は高温・多照に経過し、出穂期は平年に比べて2~5日程度早かった。

生育については、田植後の低温・寡照により初期の莖数は少なく経過したが、7月上旬後半以降の高温・多照により生育は回復し、莖数は平年並みないしやや多く、穂数も平年並みないし多かった。幼穂形成期間もおおむね天候に恵まれ1穂当たり籾数は平年並みないしやや多く、1m² 当たり籾数は「やや多」ないし「多」であった。

稔実および粒の肥大は、9月上旬と9月下旬から10月上旬の日照が少なかったものの、おおむね良好であった。しかし、登熟期間の日照不足、9月中旬の台風12号の強風等の影響で玄米はやや充実不足で、乳白粒の発生も多く品質は低下した。

2) 早期水稻

主産県の作柄は、宮崎県が作況指数114の「良」、鹿児島県が同104の「やや良」であった。

生育概況をみると、田植期はほぼ平年並みで、活着も

平年並みであった。初期分けつは田植後低温で経過したため緩慢であったが、5月の好天で分けつが促進され莖数は平年並みとなった。出穂期は、初期生育の遅れから3日程度遅かった。穂数は、7月上旬以降、高温・多照に経過したために「平年並み」ないし「多」となり、1穂当たり籾数はやや多く、1m² 当たり全籾数は「やや多」ないし「多」となった。また、出穂期以降も好天に恵まれたことから登熟も良好であった。なお、刈取り最盛期は平年並みであった。

4. 被害の概況

被害総量は71,500 tで、被害率は5.8% と平年を7.1ポイント下回った。

1995年度水稻の収穫量および被害程度

区分	作付面積	10 a 当たり収量	収穫量	作況指数	前年との比較					
					作付面積		10 a 当たり収量		収穫量	
					対差	対比	対差	対比	対差	対比
	ha	kg	t		ha	%	kg	%	t	%
九州計	256,700	510	1,310,000	106	△13,400	95	△37	93	△167,000	89
福岡	53,300	505	269,200	103	△2,600	95	△40	93	△35,500	88
佐賀	37,700	535	201,700	103	△1,700	96	△33	94	△22,100	90
長崎	18,800	467	87,800	107	△1,100	94	△1	100	△5,300	94
熊本	52,400	522	273,500	106	△4,200	93	△48	92	△49,100	85
大分	33,300	519	172,800	109	△1,400	96	△71	88	△31,900	84
宮崎	28,100	513	144,200	114	△900	97	△3	99	△5,400	96
鹿児島	33,200	483	160,400	107	△1,300	96	△34	93	△18,000	90

区 分	総合	気象被害			病 害		虫 害
		風水害			いもち病		
	%	%	%	%	%	%	
九州計	本年	5.8	1.7	1.6	2.7	0.9	1.3
	対平年差	△7.1	△4.6	△1.7	△2.0	△1.4	△0.5
福岡	本年	4.8	1.0	1.0	2.9	0.3	0.7
	対平年差	△6.5	△5.3	△1.9	△0.6	△1.4	△0.6
佐賀	本年	6.5	2.9	2.8	2.5	0.5	1.1
	対平年差	△7.6	△4.8	△0.8	△2.4	△1.2	△0.3
長崎	本年	6.2	3.5	2.4	1.3	0.3	1.3
	対平年差	△9.1	△5.1	△3.1	△3.1	△1.8	△0.9
熊本	本年	4.8	1.4	1.4	2.3	1.1	1.0
	対平年差	△6.1	△4.0	△1.2	△1.5	△0.8	△0.6
大分	本年	3.4	0.6	0.5	1.8	0.9	0.8
	対平年差	△8.9	△5.7	△2.6	△2.6	△2.2	△0.6
宮崎	本年	6.5	0.8	0.8	3.5	1.8	1.9
	対平年差	△8.9	△4.5	△2.8	△4.1	△2.5	△0.5
鹿児島	本年	10.3	3.4	3.0	3.9	1.6	3.2
	対平年差	△5.5	△2.2	△1.1	△2.7	△1.1	△0.5

注) a) 資料: 「農林水産統計速報7-62 (生・流-27)」九州農政局統計情報部

b) △印は「少ない」を示す。

c) 対平年差は、被害率の差をポイントで示したものである。

被害を種類別にみると、気象被害については、北部九州を中心に台風 12 号の乾燥風による葉の裂傷等がみられたが、被害率は 1.7% と平年を 4.6 ポイント下回った。

病害については、被害率は 2.7% で平年に比べて 2.0 ポイント下回った。このうち、いもち病はおおむね好天に恵まれたため被害率 0.9% と平年を 1.4 ポイント下回った。ただし、北部九州を中心に、出穂期前後の降雨により粉枯細菌病の発生が多かった。虫害については、コブノメイガ、カメムシ類等の食害が見られたものの被害率は 1.3% と平年を 0.5 ポイント下回った。

以上のように本年は、台風による気象被害、病虫害ともに平年に比べて少なく、被害が軽微な年であった。

(九州農業試験場水田利用部)

〔 麦 類 〕

1. 作付の概要

九州における 1995 年産の麦類の作付面積は、4 麦計で前年に比べて 2.1% 増加の 48,900ha となり、昭和 63 年以来続いていた減少傾向に歯止めがかかった。麦種別では、小麦 23,800ha、二条大麦 24,300ha、裸麦 666ha で、前年より小麦が 1,300ha(6%)、裸麦が 430ha(182%) 増加したが、二条大麦は 900ha(4%) 減少した。これは、ビール麦の契約枠減少に伴う麦種転換が影響したものと考えられる。全国的には麦作面積が微減したため、全国に占める作付面積の割合はやや増加し、小麦 16%、二条大麦 47%、裸麦 18% となった。

県別では、福岡、佐賀、長崎、熊本の 4 県で小麦が 1 ~ 36% 増加し、これに大分を加えた 5 県では裸麦が前年の 2 ~ 6 倍と急増した。福岡県、熊本県、大分県の裸麦の増加は、新品種「イチバンボシ」の作付によるものである。二条大麦は佐賀県で前年並みの水準を維持した

1995年産麦類の作付面積と収穫量

麦種・県別	作付面積 ha	10 a 当 り収量 kg	収穫量 t	作況 指数	前年との比較 10 a 当たり					
					作付面積		収量		収穫量	
					対比 %	対差 ha	対比 %	対比 %	対差 t	
小 麦	全 国	151,600	293	443,600	77	100	△300	79	79	△121,200
	九 州	23,800	370	88,100	118	106	1,300	114	120	14,900
	福 岡	12,100	358	43,300	111	110	1,100	110	121	7,500
	佐 賀	5,980	415	24,800	131	101	30	120	120	4,200
	長 崎	770	336	2,590	123	136	205	130	176	1,120
	熊 本	3,120	322	10,000	120	104	130	107	111	970
	大 分	1,820	393	7,150	126	97	△60	122	119	1,120
	宮 崎	62	273	169	107	94	△4	102	95	△8
	鹿 児 島	36	228	82	99	82	△8	92	75	△27
二 条 大 麦	全 国	51,300	375	181,600	106	93	△3,800	104	91	△17,800
	九 州	24,300	351	85,300	108	96	△900	110	106	4,600
	福 岡	5,110	352	18,000	108	94	△330	110	103	600
	佐 賀	15,000	352	52,800	106	100	0	109	109	4,300
	長 崎	1,010	383	3,870	128	81	△240	138	112	410
	熊 本	2,070	332	6,870	111	97	△70	104	101	40
	大 分	602	365	2,200	115	86	△100	103	88	△300
	宮 崎	152	300	456	106	82	△34	103	84	△85
	鹿 児 島	391	276	1,080	100	78	△112	96	75	△360
裸 麦	全 国	3,800	358	13,600	107	118	570	101	118	2,100
	九 州	666	330	2,200	—	282	430	134	379	1,620
	福 岡	76	346	263	—	633	64	253	1640	247
	佐 賀	18	300	54	99	360	13	85	300	36
	長 崎	245	327	801	123	295	162	159	468	630
	熊 本	81	293	237	—	579	67	102	592	197
	大 分	240	346	830	114	211	126	126	264	516
	宮 崎	2	250	5	104	67	△1	100	56	△4
	鹿 児 島	4	225	9	100	80	△1	94	75	△3

注) a) △は減少を示す。

b) 資料は「麦の生産に関する資料」(農産園芸局農産課) および「平成 7 年度九州地域試験研究成績・計画概要集」(九州農業試験場)。

が、その他の県では6～22%減少し、特に作付面積の小さい県での減少程度が大きかった。宮崎、鹿児島の間県ではいずれの麦種とも前年に引き続き作付面積が減少した。

2. 生育概況

播種期から3月末までの気温がおおむね平年より高く推移したため生育が促進され、莖数は多く軟弱徒長気味の生育となった。しかし4月上～中旬が平年より低温で経過し、出穂期はほぼ平年並みとなった。登熟期間も気温がやや低く、成熟期は平年より数日遅れた。5月の強風と降雨により二条大麦を中心に倒伏が多発し、被害粒の発生も多かった。

3. 作柄の概要

九州全体の10aあたり収量は、小麦370kg、二条大麦351kgで、いずれも前年より高かった。中北部各県の作況指数は小麦が111～131、二条大麦が106～128と良好な作柄、南九州2県の作柄も平年並みないしやや良好であった。収穫量は、小麦88,100t、二条大麦85,300t、裸麦2,200t、4麦計では175,600tで、前年に比較して小麦が14,900t(20%)、二条大麦が4,600t(6%)、裸麦が1,620t(279%)それぞれ増加した。しかしながら、降雨、倒伏等の影響により品質が低下し、各麦種とも前年に比べて上位等級比率が劣った。特にビール麦の多くは等外上の格付けとなり、契約枠の達成割合も低かった。

(九州農業試験場水田利用部)

【カンシヨ】

1. 作付の概況

本年の全国のカンシヨの作付面積は49,400haで前年の約4%減であり、10aあたり収量もやや減少したため収穫量は7%減り、1,181千tになった。鹿児島、宮崎など九州主要4県の作付面積は前年の95.8%と全国と比べ減少率がわずかに大きい、これまでのような大幅減は食い止められている。これは澱粉原料用カンシヨの作付が大きい鹿児島において、まだ加速度的な面積の減少が一時的に止んだためであるが、今後の澱粉原料用

1995年度カンシヨ作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当		作況指数	前年との対比				
		収量	10a当収量		作付面積		収穫量		
					対差	対比	対差	対比	
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	
全国	49,400	2,390	1,181,000	—	△1,900	96	97	△83,000	93
長崎	1,180	2,200	26,000	108	△60	95	127	4,500	121
熊本	1,390	2,510	34,900	109	△60	96	100	△1,600	96
宮崎	2,900	2,660	77,100	110	△100	97	95	△6,600	92
鹿児島	15,500	2,860	443,300	106	△700	96	97	△37,800	93

注) a) △印は減少を表す。

b) 資料は農林水産省統計情報部農林水産統計速報7-269(生産-79)(平成7年12月15日公表)による。

カンシヨの動向は決して予断を許さない。

2. 作柄の概況

本年は初夏には低温に遭遇したが、夏の日照が多く、また秋口の気温も高かったことから、昨年同様多収年となった。播種期は早掘栽培の増加等から3日程度早く、活着もやや良であった。莖葉の生育は、梅雨明け以降高温・多照に推移したことからやや良であった。着いも数は天候に恵まれたことから多く、いもの肥大は良であった。また屑いもの発生もやや少なかった。これらのことから九州主要4県の作柄は昨年より悪いものの、平均108の良となった。

(九州農業試験場畑地利用部)

【大 豆】

1. 作付の概況

本年度の大豆作付面積は全国では68,600haであり、前年より7,700ha増加した(前年比113%)。九州では9,140haで前年比125%と大きく増加した。県別に見ると福岡、佐賀、熊本の3県で増反が大きかったが、他の4県で前年に引き続きわずかながら減少した。作付の増加は平成7年度に追加的転作が実施されたことから、水田作の大豆作付が増加したことが一因であるとみられる。

2. 作柄の概況

播種期が早い中山間部では6月上～中旬に低温多雨に経過し、出芽に大きな影響がなかったものの、初期生育がやや遅れた地域が見られた。平坦部における大豆の生育期間にあたる7月上旬以降は高温多照に経過したため、生育は順調に進んだ。開花は一部の地域で多少遅れたが、着莢および子実の肥大は良好であった。

全国平均の作況指数は100と平年並みであった。九州では全生育期間を通じておおむね良好な天候に恵まれたことから、作況指数119と数年ぶりに良好な作柄となっ

1995年度大豆作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当		作況指数	前年との対比			
		収量	10a当収量		作付面積		収穫量	
					対差	対比	対差	対比
	ha	kg	t	ha	%	t	%	
全国	68,600	173	119,000	100	7,700	113	20,200	120
九州	9,140	213	19,467	119	1,816	125	7,393	161
福岡	2,130	234	4,990	131	710	150	2,600	209
佐賀	2,170	219	4,750	124	1,000	185	3,070	283
長崎	603	191	1,150	123	△27	96	375	148
熊本	2,010	225	4,520	109	300	118	1,030	130
大分	1,410	187	2,640	115	△30	98	640	132
宮崎	521	172	896	101	△89	85	△204	81
鹿児島	296	176	521	95	△47	86	△117	82
沖縄	—	—	—	—	△1	—	△1	—

注) a) △印は減少を示す。

b) 資料は農林水産省統計速報7-277(生産-82)(平成7年12月21日公表による)。

た。特に福岡、佐賀、長崎の3県における作況指数は123～131と極良の作況になった。10a当たり収量は全国の173kgに対し、九州では213kgであり、全国平均を40kg上回った。また全国の上位3位までを福岡、佐賀、熊本の3県が占めたことが注目される。収穫量は作付面積の増加と高収量の相乗効果によって、前年より約7,400tと飛躍的に増加した。

(九州農業試験場作物開発部)

〔野 菜〕

1. 年間の概況

昨年の極めて異常な猛暑・干ばつと比較すれば総体的には日照・降雨等に恵まれた温和な気象環境の中での野菜生産となり、異例の消費者物価低下の要因の一つとみなされたほどであったが、地域・時期によっては高温・乾燥・豪雨・台風等の悪影響も若干みられた。

イチゴ等の少数の品目では前年の高温・干ばつの影響を受けてのスタートであったが年始から春にかけては日射量・気温・降雨に恵まれ病虫害の発生も少なく、中北部地域の福岡・佐賀・熊本・大分各県においてはイチゴ・ナス・トマト等の施設果菜類では一部減収したが総じて増～平年並みの収量となった。鹿児島県等の南部地域では降水量が多くマメ類・ニンジン・ダイコン等の露地野菜は順調に生育したが、カボチャ・メロン・キュウリ・ピーマン等では軟弱徒長気味の生育がみられた。

4～5月にかけては中北部では降水は少～平年並み、南部では多傾向であった。梅雨入りは6月上旬の平年並みで明けは7月上旬でやや早かった。この間5月上旬と7月上旬に豪雨で一部冠水したが、この時期まではおおむね温和であり多くの品目で順調な生育を示した。夏季の気温は8月中旬以後も高めに推移し高温・少雨傾向となって露地野菜等の発芽・結球不良、イチゴの花芽分化の遅延等がみられた。秋季は9月24日に台風14号が来襲し、一部地域で定植後の果菜類等に影響したが、その他は南部地域の干ばつ傾向を除き温和であった。11月中旬以降は数年来の暖冬と異なり冬らしい低温傾向となった。

2. 冬春作

イチゴは1～2月に中休みが出て減収したが以降回復した結果、過去最高の収量となった県もあった。トマト・キュウリでは極一部で草勢低下により減収したが他はおおむね順調な生育・収量となった。ナスはすすび病等により減収した。アスパラガス、タマネギ、エンドウ、ソラマメは順調であった。南部地域においてメロン、カボチャ、ピーマン、キュウリで生育・着果がやや劣り、春バレイショで寒風害を受けた。

3. 春夏作

一部でトマト、ナスハウスの冠水、一部の中部地域の乾燥による活着不良・初期生育遅延、南部地域の曇雨天によるメロン・カボチャ類の草勢低下・着果不良・病虫害発生があったがウリ類の果実肥大・着果・品質・収量、アスパラガス、レタス、ホウレンソウの生育・収量等においておおむね優れた。病虫害の発生も少なかった。

4. 夏秋作

高温・干ばつ害が激しく発生した昨年と比較すると極めて安定した夏秋作であり、キュウリ・ナス・カンショ・サトイモ・ショウガ等では増収したが、やはり病虫害・

〔さとうきび〕

1. 作付の概要

1994/95 さとうきび年期の収穫面積は、奄美大島本島(84.2%)および沖縄本島地区(93.1%)で大きく減少し、鹿児島県9,626ha(96.9%)、沖縄県15,135ha(95.0%)、計24,761ha(95.8%)と、前年に比べ減少した。しかし、沖永良部島や石垣島等、わずかながら増加する地域も見られた。作型の構成比は、春植が減少し、春植14.8%、夏植35.3%、株出49.9%となった。NIF8の普及が沖縄県にも進み、品種の交替はいっそう進んでいる。今期の分蜜糖製造は種子島('94.12.9)に始まり、同島を最後('95.5.8)に終了した。

2. 作柄の概況

鹿児島県の10a当たり収量は沖永良部、与論島以外では上昇した。特に種子島は収量、品質共に好成績であった。品質も高く、今期から始められた新取引方法による甘蔗糖度は県平均で14.3%、基準糖度帯(12.8%)以下の原料は全体の8.6%であった。沖縄県の10a当たり収量は、宮古・八重山地域をはじめ、全体的に低かった。品質も低く、甘蔗糖度の県平均は13.1%、基準糖度帯以下の原料が全体の38.2%に及んだ。両県の生産実績は表のとおりである〔() 数字は前年比%〕。

(九州農業試験場作物開発部)

1994/95年期の沖縄、鹿児島両県のさとうきび生産実績

県別	年次	農家戸数(戸)	収穫面積(ha)	10a当収量(t)	収穫量(t)	産糖量*(t)	分蜜糖歩留り(%)
鹿児島	94/95	12,435	9,626	6,485	624,218	78,504	12.58
	93/94	12,921	9,936	5,598	556,185	67,150	12.08
	前年比(%)	96.2	96.9	115.8	112.2	116.9	104.1
沖縄	94/95	24,725	15,135	6,455	977,004	111,963	11.37
	93/94	26,356	15,924	6,801	1,082,925	128,338	11.75
	前年比(%)	93.8	95.0	94.9	90.2	87.2	96.8
両県計	94/95	37,160	24,761	6,467	1,601,222	190,467	11.86
	93/94	39,277	25,860	6,338	1,639,110	195,488	11.86
	前年比(%)	94.6	95.8	102.0	97.7	97.4	100.0

注) a) * : 分蜜糖を含む生産量

b) さとうきびおよび甘しょ糖生産実績(鹿児島県、沖縄県)より編集

生育障害の発生が多く、イチゴでは炭そ病・ハスモンヨトウ・コガネムシ、ネギでは葉先枯れ症、ホウレンソウでは立ち枯病・萎黄病、キャベツ・ハクサイ・ニンジン・ダイコン等では発芽・活着不良、トマトではマメハモグリバエ・コナジラミ類、ピーマンでは尻腐れ果・各種病虫害・枝折れ、カボチャ・ソラマメではタバココナジラミによる黄化等々が発生した。ミニトマトでは新品種導入、ホウレンソウではベト病抵抗性品種導入により生産が安定してきた。

5. 秋冬作

イチゴでは花芽分化の遅延・バラつき、病害による苗不足が発生し、低温も影響して年内収量が低下したが、品質は優れ、うどん粉病の発生も少なかった。ナス・トマトでは台風・低温により草勢・年内収量が低下した一部の地域もあったがおおむね病虫害発生も少なくかつ生育も順調に推移している。抑制キュウリではベト病が多発したが着果は良好で収量は平年並みであった。ニラは初冬までは順調であったが低温期に向かって生育遅延気味である。キャベツ・ハクサイ・ダイコン・レタス・中晩生タマネギ等では低温・乾燥による生育遅延・小玉化が、ソラマメでは寒波による霜さやが、発生した。

(野菜・茶業試験場久留米支場)

〔果 樹〕

1. 常緑果樹

1) 温州ミカン

発芽は平年並み～やや遅く、開花期は3～4月の低温のため平年比で4～7日遅かった。着花量は宮崎県の平年並みを除くといずれの県ともやや多く、収量はやや多～多であった。これは前年の夏～秋期が乾燥し、かつ、同年が不作～やや不作であったことなどが原因していると考えられる。

果実肥大は夏～秋に乾燥した宮崎県はやや不良であったが、他の県は平年並みであった。成熟期は沖縄県と鹿児島県はやや遅かったが、他の県は梅雨以降の好天のため、平年並みとなった。秋期に高温であったことが影響して、着色は全体的に遅かった。糖度は全体的に低かったが、夏～秋に乾燥した宮崎県、並びに大分、鹿児島両県の一部では高かった。減酸は極早生温州ではやや遅かったが、早生～普通温州では平年並みであった。そのため、味は宮崎県、並びに大分、鹿児島両県の一部を除くとやや不良であった。また、浮き皮は比較的少なく、ヤケや水腐れ症等の果皮障害も発生しなかった。

病虫害の発生は全体的に少なかった。カメムシの発生はやや多かったものの、被害は少なかった。また、ハダニは春～夏では平年並み～やや少なかったが、地域によって秋期にかなり多く発生した。

2) 中晩生カンキツ

中晩生カンキツの生育、収量、品質および病虫害の発生は、いずれも温州ミカンとはほぼ同様な傾向であった。

甘夏は大分県では不作、他の県は豊作で、果実肥大は比較的良好であり、糖度、酸および味とも平年並みであった。ポンカン熊本県では不作であり、鹿児島県ではやや豊作であった。着色はやや遅く、糖度および酸ともやや低かった。ヤケや水腐れ症などの果皮障害は発生しなかった。ヒュウガナツおよび清見は平年並み～やや不作であったが、味は平年並みであった。沖縄県のタンカンは日焼けの発生がやや多かったものの、豊作で果実肥大が良く、果実品質は平年並みであった。

3) その他

ビワは開花期が早く、花芽が多かった。地域によって寒害があったが収量には影響がみられず豊作であった。3～4月の低温で着色が遅く成熟も遅れた。また、酸は平年並みであったが、糖度がやや低く食味はやや不良であった。

パインアップルはやや豊作であった。2～3月低温であったため、開花期がやや遅く成熟期もやや遅れた。糖および酸は平年並みであったが、食味はやや良好であった。病虫害の発生は全般的に少なかった。

マンゴーはやや不作であった。2～3月低温であったため、発芽、開花期が遅れ、成熟期も遅れた。果実品質は平年並みで、病虫害の発生はやや少なかった。

2. 落葉果樹

1) ナシ

3～4月の低温のため、発芽は3～5日、開花は4～7日、成熟は4～7日程度遅れた。一部の地域で4月上旬に晩霜害が発生した。着花は昨年夏～秋における乾燥のため全般的に多く、収量も平年比110%とやや豊作であった。

果実肥大は平年並み、糖度は全般的に平年並みであったが、宮崎県と長崎県では糖度がやや高かった。減酸はほとんどの県とも平年並みであったが、宮崎県はやや遅かった。これは宮崎県が本年も夏～秋に降雨が少なく乾燥したことが原因である。食味は平年並み～やや良好であった。生理障害では、みつ症は発生しなかったが、熊本県の一部で果頂部にヒビワレ果が発生した。

病虫害では、黒星病およびハダニの発生がやや多く、さらにナシヒメシンクイムシが7月中旬から収穫期にかけて多かった。昨年の干ばつの影響で樹勢が低下し、胴枯れ症状が散見された。

2) ブドウ

3～4月の低温の影響で発芽は3～7日、開花は5～10日、成熟は5～14日程度遅れ、生育の遅れは北部よりも南部で顕著であった。果実肥大は長崎県と鹿児島県で良好であったが、他は全般的に不良であった。4月上旬に一部の地域で晩霜害が見られたものの、収量は前年比110～120%でやや豊作であった。

成熟期前の7～8月が高温であったため、全県とも着

色が遅く、果皮色はやや不良であった。糖度は全般的に高く、減酸、食味とも平年並みであった。ただし、熊本県は糖度がやや低く、食味もやや不良であった。

病害虫の発生は、全般的には平年並みであったが、スリップスはやや少なかった。また、べと病の発生が7月下旬以降に目立った。

3) その他

モモは着花量はやや多かったこともあり、収量は前年比105%でやや豊作であった。3~4月の低温で発芽、開花が遅れたが、成熟期は平年並みであった。これは梅雨以降好天が続いたためである。果実肥大は平年並み~やや良好で、果実品質も平年並みであった。病害虫の発生は平年並み~やや少なく、生理障害の発生はなかった。

キウイフルーツは3~4月の低温で発芽、開花が遅れ、成熟期も遅れたが、作柄としてはやや豊作であった。糖度はやや高く、減酸は平年並みであったため、食味は平年並み~やや良好であった。病害虫の発生はやや少なかった。

カキは福岡県では果実肥大および収量とも平年並みであった。宮崎県では夏~秋の乾燥で肥大はやや不良であったが、着花量が多かったため豊作であった。3~4月の低温で開花、発芽、着色および成熟とも遅れた。糖度および食味は平年並みであった。9月以降、カメムシの発生がやや多く、被害が見られた。

クリは着花量が多く、9月の台風で少し落果したものの前年比170~190%の収量で大豊作であった。3~4月の低温で発芽、開花、成熟が4~8日遅れた。

ウメおよびスモモは、収量、果実肥大、着色、品質とも平年並みであった。

(果樹試験場口之津支場)

[茶]

1. 一番茶

1月から2月下旬にかけての気温はほぼ平年並みに経過したが、3月上、中旬にはやや冷え込んだ。3月下旬にはやや高めとなったが、4月以降は平年より0.5~2℃低めに経過した。降水量については、1月以降全般に少なく経過したが、4月下旬~5月上旬を中心に降水日数が多く、降水量もかなり多かった。

3~4月の低温の影響を受けて、各茶産地とも萌芽が抑制され、萌芽期は平年に比べて、南九州では産地によっては1週間ほどの遅れとなり、北部九州でも前年の干害の影響による生育遅延もあって10日前後遅れた。萌芽後の新芽の生育は4月以降の冷涼で降水日数の多い気象条件下で緩慢に進んだ。このため、各産地とも摘採期は平年に比べて遅れ、南九州では数日程度であったが、北部九州では10日以上遅れとなった。晩霜害は局地的な発生にとどまり、大きな被害はみられなかった。

収量は、南九州では早生種でやや減収、中・晩生種で平年並みないしやや増収であった。北部九州では前年の干害の影響を受けて全般にやや減収となったが、新芽生育の不揃いによる摘採の遅れで、増収した地域もあった。病虫害については全般に少なく、ウスミドリメクラガメの発生が目立つ程度であった。

2. 二番茶

一番茶摘採後、気温は各地とも平年に比べてやや低めに経過した。降水量は、南九州では5月下旬、6月上旬に平年よりかなり多く、北部九州では6月下旬、7月上旬にかなり多雨であった。新芽生育は低温の影響を受けてやや緩慢となり、生育の不揃いも目立った。摘採期は一番茶の遅れを受けて遅れ、収量は各茶産地とも平年並みであった。病虫害の発生については全般に少なかったが、チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノホソガ、カンザワハダニが局地的に発生した。

3. 三番茶

二番茶摘採後7月の気温は、各地とも平年よりやや高めに推移した。降水量には地域性が強くみられた。新芽生育は順調であったが、生育の不揃いが目立った。二番茶に引き続き、摘採期は遅れ気味となり、北部九州の産地では晩生種の摘採を中止した地域もあった。収量は各地とも平年並みないしやや減収となった。病虫害の発生については全般に少なかった。

本年度は、前年の干害、一番茶期以降の気象の影響を受け、産地間での新芽生育の違いが目立った。なお、九州における主要茶産地の摘採期および10 a当たりの生産量は第1表に示すとおりである。

(野菜・茶業試験場久留米支場)

第1表 主要茶産地の摘採期および10 a当たり収量

産地名	年次	一番茶		二番茶		三番茶	
		摘採期 月.日	収量 kg	摘採期 月.日	収量 kg	摘採期 月.日	収量 kg
大隅	本年	4.28	225	6.14	390	7.18	440
	前年	4.26	349	6.8	599	7.13	311
	平年	4.25	535	6.9	549	7.16	332
知覧	本年	5.1	618	6.16	424	7.21	349
	前年	4.28	665	6.11	305	7.18	496
	平年	4.26	608	6.11	495	7.16	421
川南	本年	5.1	624	6.12	637	7.17	499
	前年	4.30	436	6.13	482	7.22	383
	平年	4.27	549	6.11	540	7.20	434
八女	本年	5.16	501	7.5	553	—	—
	前年	5.5	428	6.27	330	—	—
	平年	5.6	471	6.26	435	—	—
彼杵	本年	5.15	726	6.29	419	7.31	361
	前年	5.4	710	6.21	414	7.27	185
	平年	5.5	505	6.22	462	7.26	291
嬉野	本年	5.16	578	6.28	351	—	—
	前年	5.2	617	6.16	543	—	—
	平年	5.1	566	6.17	467	—	—

〔畜 産〕

1995年2月1日現在の九州・沖縄地域における家畜別飼養頭数および飼養戸数は第1表に示すとおりである。

1. 肉用牛

1995年2月1日の九州・沖縄における肉用牛の飼養頭数は、1,044,600頭で前年に比べて若干増加した(対前年比100.4%)。飼養頭数の多い上位3県は前年同様、鹿児島県(328,600頭)、宮崎県(248,300頭)、熊本県(139,500頭)であり、この3県で、九州・沖縄全体の68.6%を占めている。九州・沖縄は肉用牛の中で乳用種の占める割合が最も低い地域であり、その割合は17.4%(181,840頭)で、前年より0.4%増加している。九州の中では福岡県は例外で、乳用種の頭数が21,200頭で62.5%を占めている。

九州・沖縄における肉用牛の用途別飼養割合は、肉用種雌牛の割合が高く、53.2%(556,000頭)で、前年よりやや低くなり、飼養頭数は0.7%低下した。肉用種子とり用雌牛飼養頭数の全国に対する九州・沖縄の割合は47.6%であった。一方、九州・沖縄の肉用種肥育牛は308,200頭と肉用種の35.7%を占め、全国比では37.5%となっている。九州・沖縄地域は依然、子牛生産基地としての性格が強いが、肥育基地および牛肉供給基地として益々重要になっている。

九州・沖縄における肉用牛飼養農家戸数は、1995年2月1日、73,630戸であり、前年より5,600戸減少し(-7.1%)、従来からの減少傾向が続いている。1戸当たり平均飼養頭数は、飼養農家戸数の減少に伴って増加し、14.2頭で、前年より1.1頭増加した。全国の1戸当たり平均飼養頭数は17.5頭であり、九州・沖縄地域の飼養規模は全国よりも小さいが、この地域で繁殖雌牛飼育経営が多いことによるものである。

枝肉価格は、1995年に入り、和牛枝肉全体が低迷したが、全国的に交雑種の割合が増加している。一方、子牛価格は、上昇した。これは、乳牛から和牛へ転向する肥育農家が増加したためと考えられる。

肉用牛に関する研究では、肉質改善のためのビタミンAと肉質との関連、肉用牛改良情報システムの普及で雌牛の期待育種価の導入、高品質牛肉生産のための、超音波診断装置による肉質の早期判定技術、および良質牛肉生産のための飼養管理技術の開発が各県で進められている。また、受精卵移植(胚移植)による乳用種から肉用種子牛の生産、双子生産技術の確立、胚分割、受精胚の雌雄判別、核移植に関する研究などが積極的に実施されている。

2. 乳用牛

1995年2月1日現在の九州・沖縄における乳用牛の飼養頭数は190,720頭で、前年より6,000頭減少(前年比97.0%)した。九州・沖縄地域で飼養頭数の多い上位3

県は前年同様、熊本県(58,100頭)、福岡県(27,900頭)、宮崎県(26,800頭)であった。九州・沖縄では、全県で減少した。全国でも、195.1万頭と前年比96.6%と同様に減少した。

1995年2月1日現在の九州・沖縄における乳用牛飼養農家戸数は、4,740戸で、前年より290戸減少(-5.2%)した。九州・沖縄における飼養農家1戸当たりの飼養頭数は、40.2頭で、前年より1.0頭の増加であった。九州・沖縄の1戸当たり飼養頭数は、全国平均頭数(44.0頭)より少ないが、北海道、東海地域に次ぐ頭数規模となっている。

牛乳消費は昨年の猛暑を背景に伸びてきたが、今年度に入りやや停滞し、消費を後押しする事業および1995年4月からの乳製品関税化に対して、国産飲用牛乳消費拡大運動が展開された。収益確保のための規模拡大が進んでいるが、家族経営が中心である我が国の酪農では規模拡大は限界にきつつある。今後は大型経営の導入に伴う周辺の技術開発が必要不可欠である。

乳用牛に関する研究については、夏期における乳量・乳質低下防止のための研究、フリーストール・ミルクングバーラー方式の導入に関し、周辺技術の研究が各県で精力的に進められている。

3. 豚

1995年2月1日現在の九州・沖縄における飼養頭数は325.9万頭で、前年に比べ8.1万頭減少(-2.4%)している。九州・沖縄で飼養頭数の多い上位2県は前年同様、鹿児島県(135.9万頭)、宮崎県(76.0万頭)であり、これら2県で、九州・沖縄の飼養頭数の65.0%を占めた。全県で大幅に減少した。

飼養農家戸数は、全国で18,800戸、九州で5,400戸で、中小規模が減少したのに対し、大規模農家は増加した。九州・沖縄での1戸当たり飼養頭数は604.7頭(前年比62.5頭増加)となった。特に飼養規模の大きな県は鹿児島県(888.2頭)、大分県(692.9頭)で、これらの県は前年も上位を占めた県である。豚肉の枝肉価格は輸入豚肉の増加により低迷し、1995年11月からはセーフガードが発令された。

九州各県では品質の優れた銘柄豚を生産するために、系統豚の造成を進めているが、さらに、これらの系統豚の組み合わせ試験が行われている。また、糞尿処理技術、糞尿中の窒素等の環境負荷物質低減、清浄豚生産による慢性疾病の防止技術に関する研究等が実施されている。

4. 採卵鶏

1995年2月1日での九州・沖縄における飼養羽数(種鶏を除く)は3,684.9万羽で前年に比べて275.5万羽の増加(8.1%)した。飼養羽数の多い県は、鹿児島県(1,179.6万羽)、宮崎県(660.4万羽)、福岡県(609.3万羽)で、これらの3県で、九州・沖縄の全飼養羽数の66.5%を占めた。

九州・沖縄での飼養戸数(成鶏雌300羽以上の戸数の

第1表 家畜飼養頭数および飼養農家戸数

		肉用牛	乳用牛	豚	採卵鶏	ブロイラー
飼養頭数	全国	296.5万 (-0.2%)	195.1万 (-3.3%)	1,025.0万 (-3.5%)	14,663万 (-0.7%)	11,968万 (-6.1%)
	九州	104.5 (+0.4%)	19.1 (-3.0%)	325.9 (-2.4%)	3,685 (+8.1%)	5,042 (-10.1%)
農家戸数	全国	169.7千 (-8.0%)	44.3千 (-6.9%)	18.8千 (-14.9%)	7,310戸 (-7.0%)	3,853戸 (-6.9%)
	九州	73.6 (-7.1%)	4.7 (-5.2%)	5.4 (-13.1%)	1,630 (+3.8%)	1,439 (-7.7%)
1戸当たり	全国	17.5頭 (+8.7%)	44.0頭 (+3.8%)	545.2頭 (+13.4%)	20,100羽 (-15.3%)	31,062羽 (+0.9%)
	九州	14.2 (+8.4%)	40.2 (+2.6%)	604.7 (+11.5%)	22,607 (+4.1%)	35,038 (-2.7%)

注) a) ()内は対前年比の増減、採卵鶏は300羽以上の飼養戸数。
 b) 九州は沖縄を含む、ただし、ブロイラーは九州のみ。

み)は1,630戸で、前年に比べて60戸の増加(3.8%)した。1戸当たりの成雌飼養羽数は22,607羽と前年に比べて4.1%増加した。1戸当たりの羽数は宮崎県(24,100羽)、鹿児島県(23,500羽)が多い。鶏卵の価格は1995年8月に底値の140円代になったが、その後回復した。

5. ブロイラー

1995年2月1日の九州の飼養羽数は5,042万羽で、前年に比べて570万羽(-10.1%)減であった。全国の飼養羽数に対する九州での飼養羽数割合は42.1%で非常に高い。九州では、鹿児島県(1,883.4万羽)、宮崎県(1,835.8万羽)の両県における飼養羽数が飛び抜けて多く、この両県で九州の全飼養羽数の73.8%、全国の総羽数の42.1%を占めている。

1995年2月1日現在での九州における飼養戸数は1,439戸で、前年に比べ120戸減少した。1戸当たりの飼養羽数は35,038羽で、前年に比べて962羽減少した。1戸当たりの飼養羽数の多い県は、鹿児島県(41,900羽)、宮崎県(35,300羽)である。

ブロイラーの出荷羽数は年々減少しているが、これらの減少は輸入量の増加、飼養者の高齢化、後継者不足などの影響に加えて小・中規模階層での飼養中止および大規模階層での減羽によると考えられる。

(九州農業試験場畜産部)

〔飼料作物〕

1. 作付面積

1995年の九州地域における飼料作物の作付面積は牧草類(イネ科・マメ科の永年生、越年性生1年生を含む)が73,020ha、トウモロコシが24,320ha、ソルガム類が16,900ha、青刈えん麦が6,350haであり、総計で約12.1万haであった。総作付面積は前年に比べ約3,000ha減少しており、作物別では前年と比較して牧草類が1,520ha減(-2.0%)、トウモロコシが780ha減(-3.1%)、ソルガム類が400ha減(-2.3%)、青刈えん麦が900ha減(-12.4%)であった。飼料作物作付面積の減少は畜産農家の労力不足および円高による、輸入飼料の割安によるものとみられる。

2. 作況

1995年夏はやや高温・やや水不足であったが、台風の襲来がなく九州地域の飼料作物収量は多収であった。牧草：イタリアンライグラスを中心とするイネ科牧草の収量は6,820kg/10aで作況指数(対平年比)103とほぼ平年並みであった。沖縄県の牧草も13,200kg/10a、作況指数99とほぼ平年並みであった。一方、寒地型永年生を中心とするイネ科・マメ科混播草地は4,020kg/10a、作況指数102と平年並みであった。

トウモロコシ：収量5,930kg/10a、作況指数105と多収となった。

ソルガム類：九州地域(沖縄を除く)の収量7,270kg/10a、作況指数104とやや多収となった。

青刈えん麦：長崎、熊本、宮崎、鹿児島各県におい

1995年の主要飼料作物の作付面積と収穫量

	牧草		トウモロコシ		ソルガム		青刈えん麦	
	ha	t	ha	t	ha	t	ha	t
福岡	2,310	141,400	402	22,000	733	61,100	-	-
佐賀	1,520	104,100	198	9,740	668	42,900	-	-
長崎	5,130	280,100	1,170	62,600	2,430	163,100	738	32,100
熊本	14,900	766,100	6,670	358,200	2,180	160,400	352	12,700
大分	6,570	358,700	1,660	100,100	814	63,800	-	-
宮崎	17,900	1,201,000	7,840	484,500	5,910	412,500	1,060	29,000
鹿児島	20,200	1,439,000	6,400	402,600	4,110	317,700	4,200	165,100
沖縄	4,520	596,700	15	941	94	8,990	-	-

注) 農林水産統計速報7-238(農林水産省統計情報部、平成7年12月)による。牧草の大部分と青刈えん麦は1994年秋播き・翌年収穫。トウモロコシとソルガムは1995年播種・収穫。

て、それぞれ収量 4,350 3,600 2,740 3,930kg/10a,
作況指数 100, 101, 105, 101 で平年並みであった。

(九州農業試験場草部)

〔 養 蚕 〕

1. 概 況

九州・沖縄地方における 1995 年の養蚕農家数は 954 戸、
掃立卵量は 12,800 箱、収繭量は 424 t で、前年よりそ
れぞれ 28.0%, 25.6%, 23.7% 減少した。

この減少は養蚕従事者の高齢化、後継者不足等構造的
な要因に加えて長引く繭価の低迷が拍車をかけた結果で
あろう。

2. 作 況

桑の生育は、春蚕期は初期の低温で各県とも発芽が 3
～ 7 日遅れたがその後徐々に回復した。夏蚕期は熊本、
大分、宮崎各県で低温のため枝条伸長、収量ともやや劣っ
た。初秋蚕期は高温、少雨の傾向であったが、干ばつ等
の被害もなく生育、収量は平年並みであった。晩秋蚕期
は一部で干ばつの影響を受けたが、全体的には各県とも
生育、収量、葉質とも良好であった。なお、大分県では
台風 14 号の影響で一部枝条の倒伏が見られた。

晩々秋蚕期は一部で干ばつの影響により葉の硬化がみ
られたものの全体的には良好であった。

蚕作は、春蚕期では各県の蚕作、繭質とも比較的良
好であった。夏蚕および初秋蚕期は高温のため経過が早く、
繭は小粒になった。大分県を除く各県とも一部で膿、軟
化病が発生した。晩秋蚕期は全体的に蚕作、繭質とも良
好であったが、宮崎県、鹿児島県の一部で降灰のため繭
は小粒になった。晩々秋蚕期は蚕作、繭質とも比較的良
好であった。

なお、本年の気象災害、蚕病等による被害量は繭換算
で 34.3 t で、その内訳は干ばつ等気象災害が 24.8%、
膿病が 18.1%、軟化病が 47.8% で、全体的には桑の被
害が少なかった。

(九州農業試験場作物開発部)

1995年 養蚕農家数, 桑園面積, 収繭量

県別	農家数	桑園 面積	掃立 卵量	収繭量	前年との対比		
					戸数	面積	収繭量
	戸	ha	百箱	t	%	%	%
全国	13,640	26,300	1,552	5,351	72	78	69
九州	954	1,079	128	424.3	71	70	75
福岡	-	9	1	2.5	-	69	83
佐賀	4	10	1	2.1	40	67	42
長崎	140	166	24	83.7	64	61	63
熊本	270	385	29	94.4	75	77	77
大分	110	147	12	41.8	73	77	84
宮崎	140	130	16	52.0	70	59	76
鹿児島	250	182	31	110.8	76	69	81
沖縄	40	49	14	37.0	80	79	95

注) 農林水産統計速報 7-279 (生産-85)。平成 7 年 12 月 22 日公表
より作成。